

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所の理念を事務所に掲示し、朝・夕の申し送りの時、読み上げている。	マズローの法則の5段階目の「自己実現ニーズ」の達成に向けた法人の credo・理念があり利用者、家族、職員、三者の「共助の心」が謳われ、ホーム理念にも9人の利用者の個性を重んじながら職員が10人目の家族となることを掲げ、職員は毎朝申し送り時に確認している。利用開始時に理念について利用者や家族にも話し、毎日を楽しみ暮らしていただけるよう日々の支援に努めている。また、地域の人々との関わりの中で、利用者やホームの存在を知っていただき、利用者が一人の住民としてふつうに生活していけるように働きかけている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自身が地域の一員として日常的に交流している	地域ケア会議などで、他の施設や事業所と密に連絡をとっており、いつでも見学に来ていただけるようにしている。町のサロンにも職員が出席している。	区費を納め、地区の清掃活動や防災訓練、親睦旅行、冠婚葬祭等に普通の一軒の家として顔を出しているのになじみの関係となっている。また、介護予防を目的とした地域のお年寄りが集まるサロンの運営にも職員が関わり地域の活性化に寄与している。春の地区のお祭りには獅子舞や子ども神輿がホームを訪れ披露し、利用者も楽しんでいる。ほぼ毎日のようにお茶を飲みに来る近所の方もおり野菜などをいただくことも多く、毎秋、ホーム敷地で実る栗をお返ししている。年1回のホーム前を走る小布施マラソンの時にはホームをトイレ休憩所として開放し、利用者も沿道で応援をしている。習字や歌などのボランティアの来訪も随時あり利用者も楽しみにしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	自由にホームに訪問して頂けるようにし、利用者と実際に接して頂き、理解や支援方法を知って頂くよう働きかけている。町のサロンに来ている人達がホームに見学に来ることもある。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議で、認知症の事や利用者に対する対応などを発表したり意見を求めたりしている。また、災害対策なども運営推進会議でも発表や検討をしている。	2ヶ月に1回開催しており、家族代表、区長、民生委員、近所の方、町福祉課職員、地域包括支援センター職員などが出席している。利用状況や行事、活動内容などについて報告し意見や助言を頂いている。特に全国的に話題になったグループホームの水害の時には地区の委員の方に協力の依頼をしたり、災害時に使用できる町内の避難場所についての情報を頂くなど、有意義な会議となっている。また、地区の委員から最近多くなっている独り暮らしのお年寄りについての相談などをいただくこともある。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	町の職員や住民のホームへの立ち寄りや見学、入居に関して積極的な働きかけ、町あるいは地域密着の他、市町村の情報など、情報収集に努めている。地域包括支援センターとも密に連絡をとっている。	地域包括支援センター主催の地域ケア会議等で町や他事業所からの情報を得ており、勉強会などがあれば積極的に参加している。また、現在は該当する方はいないが後見人制度を必要とする利用者がある場合には手続きなどについて相談するなど、町福祉課や地域包括支援センター職員との連携がとれている。介護認定更新の際には家族に代わり手続きをすることもあり、町や隣市から調査員がホームに訪れ、ホーム職員から実情を話し協力している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	内部研修にて学んで、日々のケアに活かすよう努力している。防犯対策のため、現在は玄関もカギをしている。一部の部屋にはセンサーがおり、ベッドから降りたり部屋から出てくるとわかるようにしている。	毎年1回、必須研修として拘束に当たる行為や利用者の安全を守るための方法について学習しており、日々の支援の中で実践している。新規の利用者で環境に慣れずに落ち着きが見られない場合も心身の自由を確保しつつ見守り対応し本人の気持ちに寄り添い外出したいという様子が見られたら職員が付き添い気分転換している。安全の確保のため鳴き声やメロディー音のセンサーを複数使用し、万全を期している。	

ヒューマンヘリテージ小布施

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	事業所内(全体会議)研修にて学び、実践に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度については、内部研修(全体会議)で学んでいる。一人の利用者が成年後見制度を利用している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用者の退去、新規利用者の受け入れの際、説明や話し合いにより、安心して利用できるようにした。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	一人ひとりの利用者とのコミュニケーションをとり、率直に気持ちを表現して頂き傾聴に努め、すぐに要求に応じる努力をしている。家族からの意見・要望にもすぐに対応できるように努めている。	半数以上の利用者は自分の要望等を伝えることができ、職員もできるだけ早く実現できるようにしている。家族の来訪は平均して月1回ほどはあり、その際や9月に行われる敬老会時などにホームから利用者の状況を個々に伝え、意見・要望などをいただき運営に活かしている。また、ホームでは毎月家族宛に便りを送り意思疎通を図っており、管理者と看護師のコメントを必ず記入し利用者の様子を知らせており、電話やメールなどでも意見・要望を聞き応えている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々、職員と良いコミュニケーションをはかり、自由に職員の意見が言えたり、提案を取り入れ働きやすい環境作りに配慮している。不安なことがないか常に相談にのっている。	法人グループの管理者会議が2ヶ月に1回あり、その内容も含め、月1回、職員全体会議があり、各係からの業務連絡や研修、個別カンファレンスなどを行っている。職員間には話しやすい雰囲気があり、また、先輩・後輩に関わらず個々に意見や要望を言える職場風土になっており、活気が感じられる。各職員には通常の業務のほかには係があり、計画を立て、評価、修正という流れの中で意見や提案もしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理職や職員の要望にできるだけ答えて下さる誠実さがあり、率直に話し合いさせていただいている。本社から職員への面談に来て意見を聞いてくれることがある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修受講者は、研修内容を回覧し、全職員で共有化を図っている。また、代表者もスタッフ全体の各時期に、必要だと思われる研修を与えている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域ケア会議や、ホームに訪問していただくなど、同業者と交流し、互いの情報交換をし、ネットワーク内で研修、交流会にも参加している。研修で知り合った事業者の方にも見学に来てもらえるよう声かけしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人がリラックスして安心して、自分らしく過ごして頂けるよう、本人の言葉に傾聴し、動作や表情から心情を察し、素早く対応できるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族とともに何度か訪問して頂いたり、職員が自宅や前の施設を訪問し、お話を伺ったり入居前に本人に会ったりと、できるだけ要望に沿えるよう努め、何でも自由に話せる良い関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	在宅のケアマネと充分に連絡をとり、情報収集に努め、引き続きケアを継続し、まず必要な支援を充分に行えるよう努めている。家族に事前に聞き取りをしたり、支援につながるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者が感謝の言葉やねぎらいの気持ちを職員に伝えたり、家族の一員のような暖かい馴染みの関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の日々の生活の様子、体調の変化の際は、電話か面会に来たときなど、その都度お知らせしている。また、行事の写真など、面会の際などに見ていただいている。また、季節の行事やお出かけにご家族と一緒に参加する方もいる。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	日々の会話やレクリエーション、歌を歌う際、回想法執行時、馴染みの人や場所を思い起こして懐かしんで頂いている。また、利用者の友人の面会もある。	友人の訪問を受けたり、年賀状のやりとりなどを継続している利用者がいる。また、在宅時のケアマネージャーがホームに来訪し親しく話をする利用者もいる。昔懐かしい紙芝居などから馴染みの地元の土地の名前や地域の行事、習わしなどを連想し会話が弾むこともあり、一人ひとりの人となりを理解し個別ケアに活かしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ホーム内での作業やレクリエーション、その他の交流時もあるべく一つのテーブルで、皆が顔を合わせて楽しめるよう工夫している。		

自己	外部	項目	外部評価	
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	家族の都合による退去や入院後退去したのち亡くなった利用者もいたが、利用者の家族から何度も暖かい感謝のお電話やお言葉を頂いたり、退去した利用者が死亡したときは、告別式に職員が出席した。	
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>				
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の口にする言葉に耳を傾け、その中から本人の意向を汲み取る努力をしている。また、それを記録に残したり、カンファレンスやケアプランに反映している。	半数以上の方が思いを言葉で表すことができ、つぶやきなどから些細なことでも職員間で共有し実現できるように取り組んでいる。表出が難しい場合は在宅時の生活歴、できること、好きなことなどから想いを推し量り、可能な限りそれに沿えるよう努めている。また、レクリエーションなど、利用者の楽しみごとを無理のないようにしながら行うことで意欲につなげたり、退屈しないように日々の支援を行っている。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に、入居者の基礎情報を家族から聞き取り、作成し、より本人の希望を叶えられるよう努めている。また、入居前に本人が使っていた物をできるだけ持ってきていただくようにしている	
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	心情の変化、通常と違う言動をした際は、連絡ノートに記入し、職員全員で把握できるよう申し送りでも伝え、分析し、ふさわしい対応ですぐに応じられるよう努めている。また、それを記録に残したり、カンファレンスやケアプランに反映している。	
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	各利用者の担当者がアセスメントしカンファレンスシート作成し、それをもとに職員全員でカンファレンスを行う。そのカンファレンスや個人情報や記録をもとにケアプランを作成している。ケアプランは記録用紙と一緒にファイルしてありいつでも見られるようにしている。	職員は一人から二人の利用者を担当し、その方のアセスメント・モニタリングを行い、それを基に全体会議でケア方法を検討し、本人や家族の意向に沿ったケアプランを作成している。利用者の「役割」や「必要とされていること」を落とし込み、より具体的なプランを作成している。見直しはほぼ6ヶ月で、状況に変化があった場合はその都度見直し、また、看取り期には計画を別に作成している。また、申し送りや連絡ノートで状況の変化やケア方法の変更などについて職員に周知丁寧な支援に取り組んでいる。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケアプランをもとに日々の個別記録に事実の観察項目や言動を記入し、実際に対応した内容と得た情報を記入している。また、日々の変化等も記録や連絡ノートに記入し、職員間で情報を共有している。	
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	役所の手続き代行、病院への付き添い等を行っている。理容院への出張依頼や、ご家族と一緒にのお出掛けしたりする利用者もいる。	

ヒューマンヘリテージ小布施

自己	外部	項目	外部評価	
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	町のサロンに職員が出席したり、サロンに出ている町の方たちにご時々見学に来たりしている。7月は、小布施マラソンの応援やボランティアを行う予定になっている。	
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	高齢化に伴い受診する機会が増し、家族では、対応できない場合が多く、職員がゆだねられ受診の付き添いや主治医との連携を密にとっている。	本人や家族の意向に沿って主治医を決めている。ホーム協力医には看取り期や緊急時など、必要に応じて往診していただけるようになっているので協力医に変更する方もいる。定期受診や専門科目の受診については管理者や看護師が付き添うことが多く、受診状況も管理者または看護師から利用者の家族に正確に伝え、それぞれの利用者に合った対応を話し合っている。ホームには非常勤の看護師2名が勤務しており随時相談することができる。
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	非常勤の看護師が2名職員として勤務している。薬の依頼や各利用者の変化や情報などを伝え、相談し、必要があれば受診や往診を依頼している。	
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	昨年、入院した利用者2名いたが、職員が度々お見舞いに訪問したり、ドクターからの説明を家族と一緒に受けたりし、安心して入院できるように努めた。	
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所で行けることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期の対応は、それぞれの家族や主治医との相談の上、決定している。その際、家族に十分に説明し、納得して頂けるよう努めている。今までに9名の利用者を看取っている。主治医は24時間対応してくれている。	ホームには重度化した場合や終末期のケアについての方針があり利用開始時に本人や家族に説明している。利用者も高齢化してからホームの利用に到るケースが多く、直面した場合には本人・家族の意向に寄り添い、方針の変更も可能であることを常に伝えながら話し合いを繰り返し、主治医と連携のもと、この1年で1名の方の看取り支援を行った。現在も対象の方がおり、その利用者の昼・夜の「緊急マニュアル」を作成し、連絡の仕方や対応なども細かく記し、どの職員でも同じ対応ができるようにしている。また、記録も細かくされており毎日訪れる家族にも経過が分かり易くなっている。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時マニュアルがあり、すぐに取り出せ見れるようになっている。また、全体会議でもターミナルケアや緊急時の対応など学んでいる。実際に急変や事故発生時の対応で、すぐに医療機関と連携が取れた。	
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身に付けるとともに、地域との協力体制を築いている	防火管理者立ち合いで、職員による避難訓練を昨年2回行った。今年、防災訓練を1回行った。これから夜間の避難訓練を1回行う予定である。	県主催の「災害時の避難行動」についての研修会などに参加し職員全体会議でも伝達し防災意識の高揚を図っている。年2回、避難訓練を実施しており、うち1回は夜間想定で行い、利用者も非常階段を使い参加し、一連の通報、消火、避難訓練が行なわれている。消防署員も参加し指導している。非常持ち出し用のリュックが二つあり、消防設備も完備している。日頃から近所の方や区長にも協力を依頼しており利用者の一時避難の見守りもお願いしている。備蓄品も充分準備されており、万が一に備えホームの畑でジャガイモなども栽培している。

ヒューマンヘリテージ小布施

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりに優しく豊かな接し方、敬語を使い会話している。利用契約書にも個人情報の取り扱い項目があり、説明している。また、外部からのお客様を受け入れることも家族に承諾を得ている。	常に人生の先輩とし尊敬の念をもって利用者に接しており、特に言葉づかいは必ず敬語を使ことを職員間で確認している。日常動作の声掛けは臨機応変ではあるが一人ひとりに丁寧に依頼する言い方でホーム全体の言葉のやり取りにあたたかい雰囲気を感じられた。排泄や入浴の異性介助について拒否する利用者は現在なく、利用者との信頼関係が築かれていることが窺える。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の意見や希望を否定せず最後まで、傾聴している。苦情や不満など表現しにくい事も日頃から良いコミュニケーションをとり、言いやすい関係作りをしている。その日着る洋服も本人に選んでもらうこともある。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	1日のスケジュールは、おおよそ決まっているが、一人ひとりの体調、希望に沿い、食事時間、メニュー、1日の行動スケジュールを柔軟に対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	1日中、パジャマでいることのないよう、日中は更衣して頂いている。また、体調不良などで、やむを得ず日中パジャマでいる場合は、家族に承諾を得ている。また、その日着る洋服を本人が選んだり、自分で顔を洗ったりする方もいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者が、色々な役割を持ち、食事の準備や配膳、盛り付け、食器の片付けなどで参加している。参加できない方も、食事の準備を見て楽しみにしている。	全介助の方が半数以上おり、利用者の食事時間を二部制とし職員の手と目が十分行き届くように工夫している。また、キザミやトロミ、ミキサー、おかゆなど一人ひとりに合わせた形で提供されている。近所の方からの野菜や敷地内の畑の野菜・栗などが使われ、職員の考えた彩り豊かな、また、季節感のある料理が食卓に上っている。誕生日には特別メニューを楽しみ、職員手作りのケーキでお祝っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	バランスを考えた献立と、食欲低下や充分栄養を取り入れられない方については、食事量・水分量をチェックし、摂取しやすいように刻み食、ミキサー食、好きな食品など提供し、補うよう調整している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔内の清潔保持に努め、口腔内のトラブルの有無をチェックし、適したケアができるよう、スタッフ間で情報を共有している。必要時、家族に連絡した後、歯科受診している。義歯は随時消毒している。		

ヒューマンヘリテージ小布施

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	気持ち良く排泄できるよう、定期的にトイレ誘導し、ゆとりある仕方では尿を待つよう支援している。オムツの使用を減らすため、排泄状態に合わせた、リハビリパンツや尿取りパットの選択と当て方の工夫をしている。	自らの意思でトイレへ行ける方も半数弱ほどおり、できるだけトイレで気持ちよく排泄できるよう支援している。利用者の状況に合わせてリハビリパンツや布パンツなどを使用し、居室にはトイレがあるが、夜間のみ安心のためベッド近くにポータブルトイレを置く方もいる。排泄状況も時系列的に一週間単位で記し体調管理の目安としており、トイレでの介助記録、リハビリパンツの使用状況なども連絡ノートに記入し全職員が共有することで快適な支援に繋げている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	各自の排泄パターンに合わせ、水分の調整、下剤の使用調整や、乳製品を毎日飲むようにしている。また、運動不足解消に軽体操、レクを実施している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	各自、定期的に入浴し、汚染時や皮膚のトラブルがある方は、なるべく頻繁に入浴するように配慮している。必ず週2回～3回は入浴している。入浴以外では清拭も随時行っている。	利用者の希望に沿って週2回から3回入浴できるようにしている。事故防止のための見守りを含め、全員が介助を必要としており、職員二人で介助をする方もいる。浴室用の車イスチェアなどを使用し、安全にゆったりと入浴できるように努めている。紅葉狩り等の外出の際に温泉地の足湯などに立ち寄りたり、季節ごとにリンゴ、ゆず、薔薇の花などをお風呂に浮かべ、楽しめるように工夫している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの希望や、スタッフが観察して休息が必要と思われる時は、ホールの居間にベッドが設置してあり、いつでも休めるようになっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬のファイルがあり、職員全員が閲覧できるようにしている。症状の変化があった場合、看護師がドクターと相談の上、処方してもらっている。薬が変わった場合、連絡ノートに記入している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	食事の手伝いや片付け他、日々の生活の中で、必要な仕事の手伝い、秋には栗拾いや庭掃除、草取りなど各自できる範囲で行っている。日々のレクリエーションを行ったり、外出支援を行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い日は、時々散歩に出掛けたり外食もされている。また、出掛けた時の写真を家族に見ていただいている。時々、家族と一緒に散歩にでかける利用者もいる。	外出の際に車イスを使用する方が半数ほどいることもあり、無理のない距離でホーム周辺を散歩している。ホーム周辺には名所・旧跡など見どころも多く、利用者の希望、身体機能や体調に合わせ、季節毎に人形博物館、花見、バラの見学、紅葉狩りなどに少人数で出かけている。ホーム内にもその時のスナップ写真が掲示されており晴れやかな表情が見られた。また、回転寿司や小布施ハイウェイオアシスなどへ外食に出掛けている。	

ヒューマンヘリテージ小布施

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	おこづかいは、職員が管理している。高額な買い物などは、本人または家族に承諾を得ている。おこづかいの明細や領収書は月1回本社から各家族に送られている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	どうしても家族と話したいという利用者には、電話で家族と話していただいたり、また、暑中見舞いや年賀状を一人ひとりが一言書いて家族に出している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	エアコンやファンヒーターも完備しており、適度な温度・湿度管理をしている。リビングも落ち着いた感じになっており、壁には季節を感じさせる貼り絵や写真を飾っている。	玄関を入り中扉を開くと食堂と居間が続き、居間の部分も吹き抜けになっており開放感がある。共有部分は床暖でエアコンもあり、日中をここで過ごす利用者が多い。食堂に並びキッチンもあり職員と利用者が和やかに話をしながら食事づくりに動んでいた。畳スペースにはソファやベットが置いてあり、利用者が休養を取りつつ他の利用者の話に耳を傾けていた。玄関横には事務室があり来訪する家族にも声をかけやすく、2階にある多目的室も広く、会議や交流スペースとして利用されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	1つのテーブルを囲み、楽しく会話やテレビを見たり、レクリエーションを楽しんでいる。また、休みたい人は、ホールのベッドで横になって休んだりしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	各居室にはトイレ、洗面所が設置されている。また、入居前までの生活用品が持ち込まれ、その人らしい居室となっている。温湿度計も設置してある。	居室の壁面には職員手作りの誕生日メッセージカードや外出時の写真、家族の写真などがコンバクトにまとめられ張り出されている。居室も床暖であるが、エアコン、トイレ、押入れが備え付けられており、利用者は快適に過ごすことができる。居室にはベランダがあり、また、掃き出し窓であるので外光が入り明るい。使い慣れた家具などが持ち込まれ、家族等の来訪時に歓談できるように椅子なども置かれている。押入れ内も整理整頓が行き届いており、職員の細やかな気配りが感じられた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	台所用品の片付けができるよう、引き出しにネームを付けている。また、洗濯物をたたんでいただいたり干してもらったり、毎日の仕事にできるかぎり携わって頂いている。		